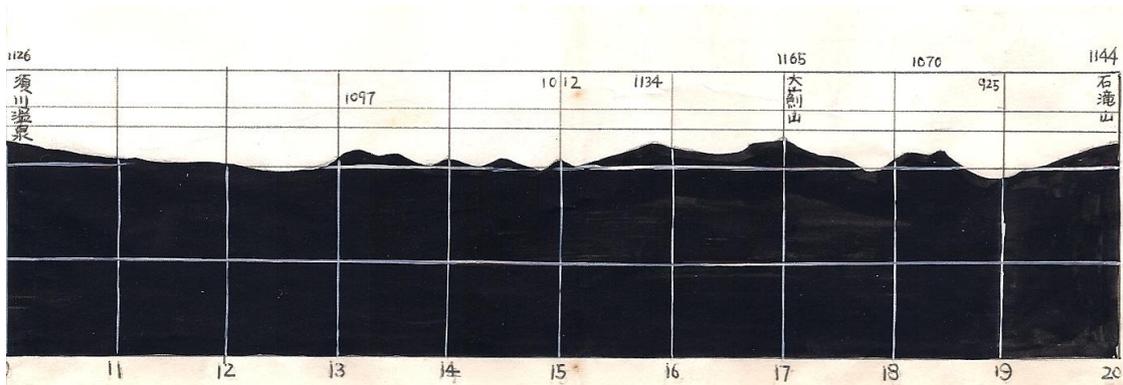


第三章 奥羽山脈北部

栗駒山―焼石連峰、真昼山地―仙岩峠―八幡平

「単独の挑戦は精神的に体力的に可なりの制約を受けるし、行動自体が自衛本能が働いて控え目となるのは止むを得ない。例えば独りでのラッセル、難場の突破（ジッヘル無し）無視界時のワンデリングなど多々デメリットが発生する。誰のサポートも受けずに縦走したい。サポートを受ければ成功率は飛躍的に高まるのも確かなら、ノンサポートにはそれだけに価値があるのも事実なのだ。」



栗駒山・焼石岳積雪期縦走

平成二年三月二日〜二六日

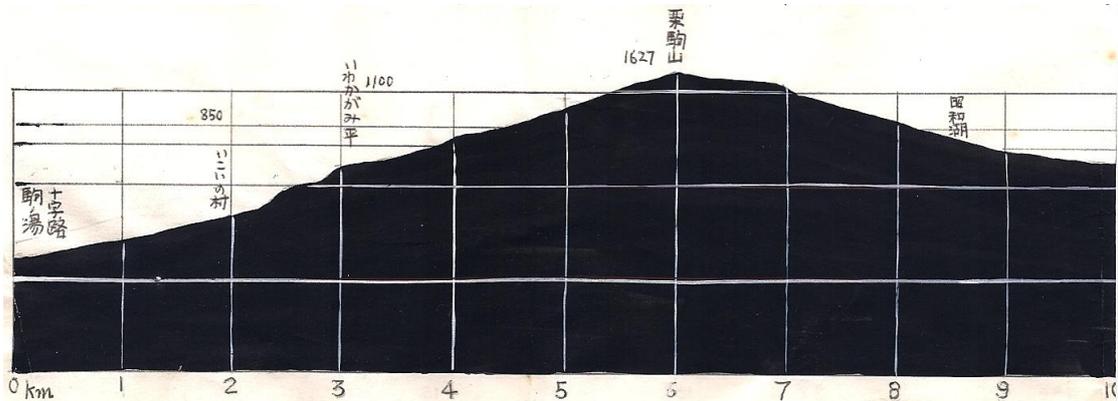
L・今出隆康、小関純夫

昭和六一年正月合宿は焼石岳の集中登山であった。秋田側から蟻巣山〜三界岳經由の一隊、尿前川〜経塚山經由の一隊、ツブ沼夏道ルートの一隊が焼石岳で集中、銀名水小屋合流という合宿であった。

同年三月、合宿の尿前川経塚、焼石岳間のトレースを手掛かりに栗駒山から県境を縦走して焼石経塚までいたる山行を計画。最大積雪期であり雪の締まり日照時間の有利性、晴天率等から彼岸前後とした。須川温泉以北、焼石岳以南は一〇〇〇メートル級の低山地帯で殆ど夏径もなく、名山の誉れ高き栗駒焼石の狭間にあつて観光資源に乏しく幸か不幸かボサ山として原始性を秘めてひっそりと存在していた。このような長大な尾根を縦走しようと叫んでも地形図六枚繋ぎでは賛同する人が居る筈もなく最初から単独行で計画を進め六日間程でやれると信じていた。

(第一回) 昭和六一年三月二日〜二三日

三月二日、弟の車のサポートを受けて栗駒いこいの村まで入山。到着はしたが山は大荒れでブナの森の咆哮、車もグラグラ揺られる。いこいの村で泊まって荒れが鎮まったら出発したらと、しきりに勧める弟を振り切つて九時出発。三步進んで二歩退くようなエネルギーの浪費を続けながら一〇…二〇いわかがみ平に到着。レストハウスは雪に埋もれ前進も留まることも断念、押し戻されて栗峰小屋の近くまで下山。幕営とし昼前から沈殿。



四時の天気図、次の低気圧接近、恢復の間も与えず悪くなりそうである。風の弱い所に幕営したが夜半物凄風が吹き抜け又寒気酷しい。

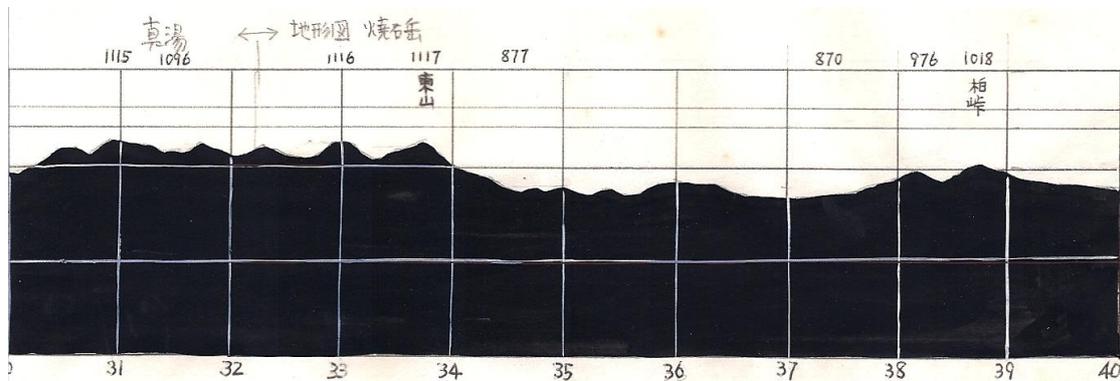
二日目、やや穏やかとなりガス吹き上げる栗駒山山頂に駆け上がる。九・四五ノンストップでコルまで下り、須川温泉まで急降下。

一・一〇雪に埋もれ冬眠中の須川温泉で昼食。広大な県境平を越えて初峰は一三・〇〇登頂、雪庇発達してワツパ好調、この調子では桑原岳もと錯覚が起こる。一時間で大薮山、しかし大薮北峰から雪のコンディション悪くなり難渋、石滝山を目前にしてヤセ尾根上に幕営。

夜半から強風が吹き荒れ南岸低気圧九八六ミリバルが北東進、近畿東海は一〇〇ミリの大雨、東京は湿雪の為交通が皆ストップ中らしい。何度か起きて埋まるテントの除雪をする。

三日目、冬台風は相変わらずなので諦めて停滞とした。ドーンと来る突風で朝食用につくったコッヘルの水が持ち上げられてシュラフを濡らしてしまった。四日目視界はガスで塞がれている中を地図磁石で出発、前進ではあるが二日間の停滞のため脱出行である。未明に胆沢平野の街の灯をみたがあれは幻か？ガスと重いラッセルの登降の連続だ。二時間で桑原岳・・・ここで西進中リングヴァンデルングの恐怖を味わう。佇んでは僅かのガスの薄れの中から地形を判断し現在位置を割り出して前進する行動を繰り返し短いピッチで行く。

栃ヶ森以後の三・五キロメートルはブナの巨木帯であったが一〇〇〇メートル級の数峰が形成する東山群に至って二峰の一・一五Pを東山と誤認、大柳下降に失敗、何度も登り返しを続けた上で疲労困憊しながらも納得の尾根を発見し大柳部落へ下山した。湿雪に暮れる大柳部落の高橋商店さんをお願いして十キロメートル先のなるせ温泉へ送ってもらい一泊した。



氷雪の修羅場踏み越え幾山頂

成瀬の湯宿河鹿鳴く朝

(第二回) 昭和六二年三月三日〜七日

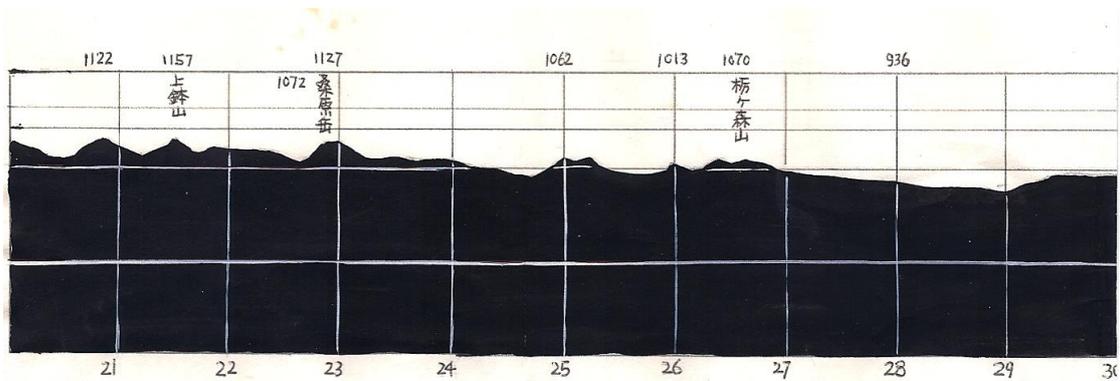
第二回目は翌六二年三月三日、お雛祭りの出発。今度は逆縦走として経塚山を初峰に決め前回の雪庇クレバス墜落を戒めて安定期を狙った。東仙台駅より列車にて水沢駅へ、タクシーを雇って石刈尿前まで行く。初日から湿雪が降り陰気な天気、しかし行かねばならぬ、悪天の次に好天を信じて。林道は除雪されて人の丈くらいの両側壁となっている。工事のトラックが通っていてぬかるみが酷い。尿前橋から除雪もなく深いラッセルが待っていた。計画線上をたどり経塚南稜取付点にて幕営、強風を避けて設営したつもりだが森全体がゴウゴウ騒がしく仲々寝付かれぬ。

二日目、夜来の嵐で雪庇も成長、新雪のラッセルに苦しむ。重い装備とラッセルでペース抄らず、空身で雪庇突破のルート工作も幾度か。吹き溜まりでは腿に達するラッセルである。南稜上の膨大な風のエネルギーは計り知れず、ピッケルでステップをカットしながら経塚山に立ったのは一二・一〇。岩の陰に寝そべって休憩。風に逆らうこと二時間、雪の播り鉢の底に金明水の小屋発見、強風で幕営は無理と判断して早いけど小屋に入る。

天気図は大変悪い。黄海の九七二ミリバールの低気圧が東進。西日本は既に雨域だ。

三日目、夜明け前、星のきらめきと天竺山の姿をみた。もしかすると午前中くらい天気が保つのではないか。準備完了して窓から飛び出すと既に横縞模様の雪が飛んでいた。悪けりや引き返そう、逡巡している暇はない。視界百メートルもあればやれる。しかし昨日も今日も焼石本山は雪雲の中で何も見えぬ。

行動二時間後、東焼石岳の山頂に達した。広い原の頂上にシユカブラを打ち砕き標識を

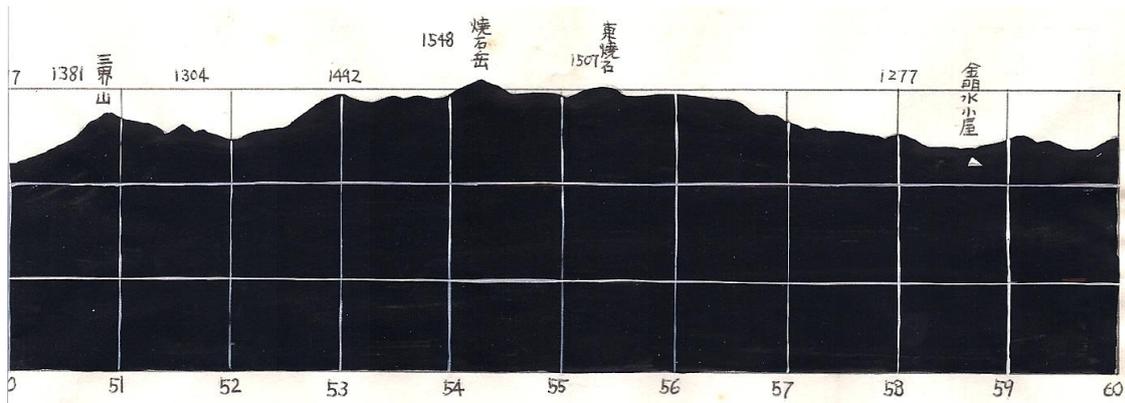


確認、進路真向かいから烈風に乗って雪礫が顔面に炸裂し目を開けていられない。されば風に背を向けて金明水の小屋に戻ろうと振り向いたが既にラッセルも視界もなくなっていた。

進退極まれりと覚悟、一刻も早く幕営か雪洞に避難する必要があった。必死に場所を捜したがこの付近には見出せず斜面の雪をVカットして人間一人分の平地を作りサレワテントを小灌木の根にアンカーして骨なし状態で潜り込む。九・四五マット、シュラフの中心でほっとする。次第に雪が吹き溜まりテント内が息苦しくなってくる。午後テントの中間フレームを取り付け成功、しかし入口の外フレームは途中で断念、フレームが入った事で一度だけホエーブスが使え湯を貯めた。夜明けてホエーブスを焚こうとしたが、一夜で空間は益々狭くなりためくテントの空気振動でライターもマッチもメタに点火出来ずに断念。半分になったテント内に胎児のように卵型に丸まってサナギの形でじっと耐える。

停滞第二夜も同じであった。ウツラウツラとまどろんではすぐ目が覚めて風の唸りや雪の圧力に懼れ戦き、手足の凍傷の有無を確かめるのだった。非常食を齧る程度で水分も節約し排泄を極力押さえて膝を抱えたままの窮屈な生活、酷寒が味方で皆凍って湿気が生じないことが逆に凍傷を防いでいるのだ。

明けて七日の朝、強風は相変わらずだが今日は気圧が緩み、次いですぐ悪くなるものと予想された。凍った靴、スパッツ、ワッパを着けて生還への脱出だ。数十メートル登ったら東焼石岳頂上だ。まだ視界は開けぬがシュカブラを落として標識確認、南西へ三〇〇メートルの視界を得て前方に木道が見えて夏道あり、姥石ヶ原を通過中、姥石平を南下、銀明水小屋を目指す。南斜面の雪原は巨大な吹き溜まりで膝から腿までのラッセルで見当をつけて行ってみたが銀明水小屋見当たらず、そのまま地磁石で下山を続ける。ツブ石の夏径迷走性地形、尾根を忠実に辿ろうとしても沢状が現れる。一〇〇一Pの尾根に出る為又遠回りしてしまう。岳山に出て尾根が広くなり金山沢は厚い雪層の下で音さえ聞こえて



こない。

ここからさらに三キロメートル、ついに車道に出たが道路は一メートルの積雪、時計は一六・二〇であった。陽もとつぷり暮れてダム管理所の燈火の下でワツパを脱ぎ、除雪の道路をバス停へ急ぐ。凍結していて危険なのでピッケルでバランスをとり疲労と空腹の身を励ます。寺島商店バス終点。その時大型バスの前半分が見え、運転手が前扉から飛び乗るのが見えた。あつ発車だ五〇メートル走った。大声も出した。一八・二〇発車。帰宅は夜一一時近かった。

(第三回) 昭和六二年三月二十九日〜四月二日

経塚山からの逆縦走の失敗を乗り越え半月の後、再び行動を起こす。栗駒山からの入山であったが、折悪しく台湾坊主と重なり停滞と大雪のため断念。秋田側へ脱出。

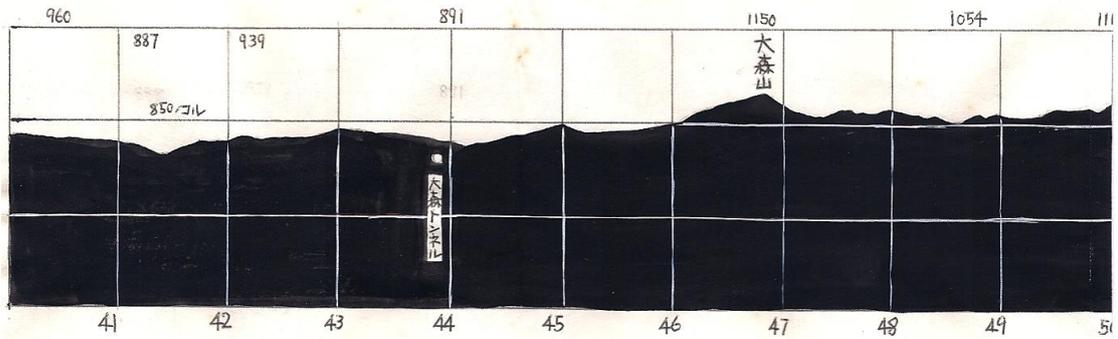
「湯沢行」山下るバスに雪面の

黒き墓頭と 朱のけずり花

(第四回) 平成元年二月一九日〜二二日

栗駒山からの入山で今度こそ完走を目指したがこの期間好天が五日間続くわけはなく、単独行の新雪ラッセルと石滝山付近の雪庇のクレバス墜落による脚の捻挫により縦走の中間地点東山より三度目の脱出下山となった。

栗駒・焼石間七〇キロメートルは一日一五キロメートルづつ行動して五日必要なり。晴天堅雪状態が五日間保障されねば完遂は難しく又避難ルートが極端に少なく中間の低山帯は雪質が不安定で危険性も高い。県境は複雑で視界と読図力が要求される。



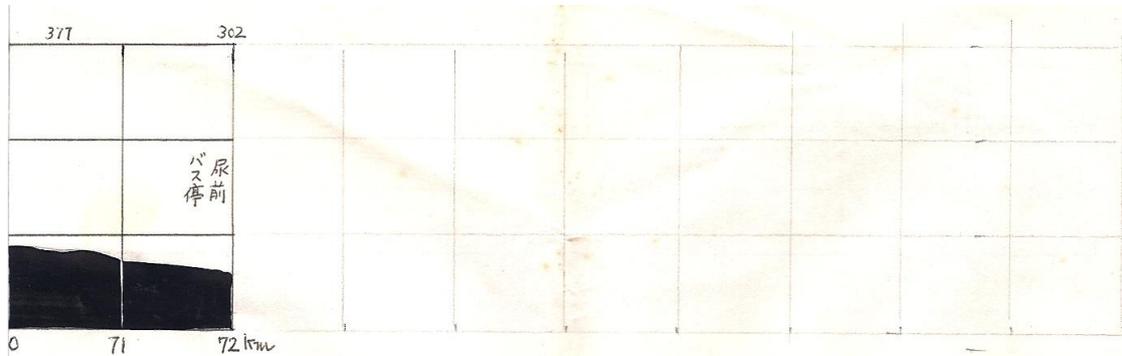
(第五回) 平成二年三月二一日〜二六日

小関君が栗駒山から焼石縦走計画に興味を示しはじめていた。彼がパートナーなら申し分ないとは思いつつも助っ人の力を借りて成功しても面白くない。当初から単独行で完成してはじめて意義があると心に決めて何度も失敗を繰り返したのだから。今年は寡雪で縦走は無理なのではないか、と言うことでいろいろ議論もした。次第に小関君は積雪が心配な栗駒焼石県境よりも平ヶ岳のスキー登山に気が向いているのを察知して、彼の計画が具体化した瞬間に単独行を決行して彼を捲いてやろうと考えていた。

例会の席上頃はよしとみて俺は県境をやる宣言したら、彼もすかさず御同行願いたいとのこと・・・ハタと当惑したが、この誰も顧みないヤブ尾根を歩きたいとは、これまた奇特な御仁。しかも一週間は費やさねばならぬ長丁場を覚悟の上で。これを天佑と解するか、迷惑と厭うか・・・。

三月二一日 春分の日、五・一〇小関君を迎えに行き一旦自宅に戻る。車には長女あずさと三女たかねも乗車。四号線を北上、栗駒いこいの村までチェーンなしで乗りつけた。しかし風雪模様となっており、その中で服装整えスパッツをつけて出発となる。

七・三〇娘二人の見送りに感謝して登る人帰る人と別れを告げる。付近は一メートルの積雪でガッチリ雪締まる。通い慣れたイワカガミ平へ冬ルートをたどりダイレクトに登攀四五分。万一の為にレストハウスの避難小屋を検分しておく。難なく扉開きここで休憩二五分、ゴア上下の完全武装で暗闇の穴から白銀の世界へ飛び出す。雪面にはシュプールやらワツパやらの踏み跡が多数入り乱れて雪締まる。風雪の為、視界も悪く時々うつすらと景色が見え隠れする。風に翻弄されて前進するのに偉くエネルギーを消耗する。雪は例年の半分のため灌木帯の通過は陥没だらけで楽でない。頂上直下は真空地帯で風もパツタリ無くなった。

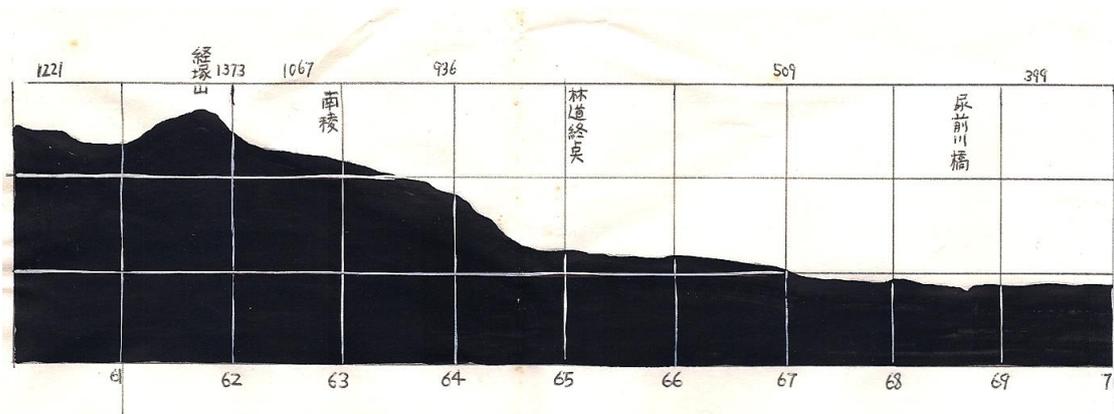


栗駒頂上一〇時、神社の一部が見えるものの殆ど巨大なシユカブラに蔽われて厳肅に鎮座します。頂稜を南下し須川分岐までの区間は猛烈な西風の吹き上げで雪礫に顔面を叩かれる。風上に思いつきり体重を傾けて風と対抗しつつ、この一キロメートルの尾根上は呼吸もできない程の風との闘いで三〇米以上吹いていたものと思われる。しかし視界数メートルの中で見た樹氷の見事さに一とき感動を覚えざるを得なかった。

分岐点を確認後、須川温泉に向かって急降する。程なく強風帯を脱出し広大な雪の緩斜面を下ることになる。難場を突破したことで豊かな安堵の中、下りステップはまことに軽い。やがて左手に昭和湖、剣山など現れ、名残ガ原、湯の香り、硫黄のガス臭などと共に須川温泉の建物群が散在して見えてくる。いつもここが昼食地点だったが今回もそうだった。正午に一〇分前、ここで幕営は早すぎるし、今冬は雪が少なく温泉の家屋は大部分露出していた。又源泉付近は湧出する湯の為、夏と余り変わらない状態であり、小関君は後日の温泉山行の偵察も兼ねて調査していた。天幕サイト、入浴場所、湯温など確認後、一部露出している舗装道路へ出てからキャンプ場水場の雪の上で昼食。例年屋根だけ雪上に露われているのに水道蛇口位まで雪面が下がっていた。

二〇分程の休息を終えて、いよいよ大平原の縦断をはじめ。直線距離で二〇〇メートルの北上であるが樹林や沢が入り乱れて、ひたすら一本調子に進めばよいと言う訳には行かない。動物の足跡やらアオ（カモシカ）の枝喰いなどを見ながら沢状を越せば大平原も終わり県境山脈へ取り付くことになる。時計は一二・五〇。ここより遠慮して三步退いて歩いていた小関君がトップ交替して先行してくれることになった。

今日の天気は冬型で時々薄日がさすが、すぐ風雪となり高いところは雪雲の中である。一枚目の二万五千分図「栗駒山」を終わり二枚目の「真湯」に入る。一三・一〇初峰一〇九八Pに立つ。霧が吹きかかり視界四〇メートル、依然ワツパなしである。この山頂に立てば雪少なき年といえども、ここ県境尾根はしっかりと雪積もり又、見事な雪庇が発達し

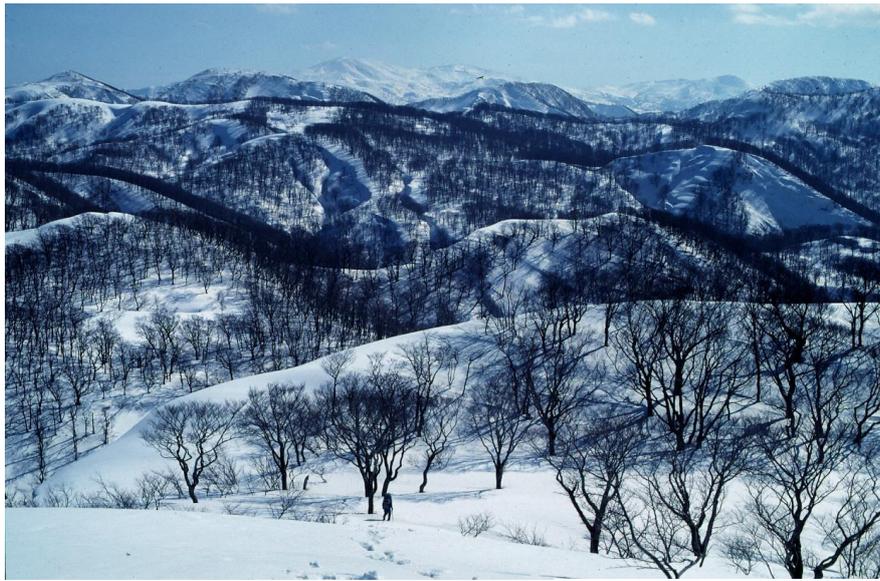


て今までの杞憂は吹っ飛びいやが上にも元気が湧き出す思いであった。初日の成績は長い縦走の日程表に大きなウエイトを占めるものであり成功の確率を高くする。五つ六つの小峰をヤセ尾根で繋いでいる危なげな雪庇帯、クレバスが大きく開いたザクザクの雪庇、ある時はクレバスをまわり込み、雪庇を逃れて西斜面のヤブ漕ぎと目の前の変化に対応して気を許す暇なし。

一五〇〇 大アザミ山前峯と本峯の中間地点にビバークを決定する。しかしこの付近はやせ尾根の連続で僅かな平地もない。この先頑張っても泊地を見つけないのは困難なので早めに幕営を決定、リュックをデポして周辺を偵察する。

小関君がジュラルミン製スコップの先端を不用意に雪面に置き「アッ」という声に振り向けばまるで櫓のように急斜面を滑り出した所だ、急いで雪面を追いかけたが何度か立木に当たりそうになりながらもカッコよく櫓型になり落ちていったが諦めるわけには行かぬ。堅雪とは言え一〇〜二〇センチはぬかるので追いつけず、しかし先々とスコップから目を離さずに追跡を続け高差二〇メートル位のところでは沢状地形があり、その沢を雪庇が塞いだところでそれは止まった。やれやれ危なかった、もう少しで木賊沢に消える所であった。雪の斜面をブロックカットして五本に立木を利用して防風壁を構築し併せてテントサイトを造成した。ゴアのツェルトを立木に渡して幕営に入る。今日の行動は一五キロメートル歩いた。

三月二二日、眠くてしようがないが五時には炊事をはじめた。その割に七・四〇出発は早くない。今日も頑張ろうと意気旺かな二人である。二〇分余りで大薊山。雪庇が頂上を覆って視界が遮られ、また雪庇が危険な状態なので西斜面をトラバースの連続で進む。下降中に標高差一〇〇メートルの祭時山が見えないのに気が付く。あれ？おかしいぞ、一〇分以上降りたが、ここで地図磁石・・・しまった。方向が一〇度西偏してしまっ



栃ヶ森から遠く栗駒山

る、立派な別尾根だ。再びラッセルを辿って大薮山に引き返す。やっぱり祭時山があった。しばらくは祭時山の扁平な山体を常時右手に見ながら縦走しなければならない。中間ピーク一〇七〇メートルで一本立てる。

一〇・二〇石滝山の肩に着く。石滝山一一四メートルはこの付近では唯一、その名の如く岩場を南面に持つ雄峰であるが先を急ぐ私たちにはその頂上を極める余裕は与えられないのだった。ここで一息入れれば太陽が見えてうれしい。冬型気圧配置が続いて偏西風が相変わらず強くおかげで雪はまだまだ締まっっていてツボ足で縦走を続けられる。石滝山の肩からほぼ直角に右折して県境を辿る。いずこも瘦尾根の連続と小ピークの登降を繰り返し、雪庇の行ける所は雪庇を渡り危険を予知しては秋田側のヤブをトラバースしながら上鉢山、桑原岳と進む。

一二・〇七桑原岳で昼食タイム。曇、西の風七メートル。「真湯」の地図にはその真湯以外に人の住むところはなく、その真ん中に桑原岳は最も人里離れた山奥と言えそうである。これとて抜き出た高度もなく、殆ど同高の山がひっそりと並び全山ヤブに蔽われて世人に認められものは見出し難い。しかも東北の名山たる栗駒山・焼石岳の存在がますますこの山域を日陰の隠し子にさせてしまったのか。夏径とてないので沢登りも発達しないのか。

桑原岳は三度目の登頂となった。地形もルートもほぼ暗記していて懐かしくもある。リングヴァンデルングで背筋も凍ったことも思い出される。焼石岳頂上部に雲あり、しかし山体はよく見え天竺山経塚山まではつきり見渡せる。山体の白雪の上を黒い雲の影が凄いで駆け行く。

桑原岳白き焼石まばゆけり

黒き猿岩青き湖(うみ) 見ゆ



三〇分の大休憩の後、山頂部をU字型に変針して下鉢山に向かって西進を開始、ヤブもなく大きな雪堤を悠々と歩く。西から北へ更に北東にと半周するように県境を辿る。視界の効かない時はこのルートは極めて難しい。しかし、今日は違う、先々とルートを明瞭に見極めて行動できるこの幸せ！それにしても変曲点の多い県境である。

一四・〇二栃ヶ森（一〇七〇メートル）に立つ。この山は高原状に三つのピークが存在する不思議な山。一番手前のピークからすぐに左折し沢状の凹部をトラバースして北進、西進、南進となりすぐさま北西へU字型に湾曲して県境をたどる。高度穏やかに下りブナ樹林帯に入っていく。

天気はすっかり快晴となり空行く飛行機雲が美しい。小関君は写真を撮っているのかやや遅れ気味となる。気持ちのよい雪原に出て真ん中にもっこりと小雪庇があり、その日陰で休息した。ラッセルは一〇〜一五センチ位、新雪が五〜一〇センチあり・・・旧雪と新雪の紋様が四色位のコントラストをみせ実に美しく思わず見とれてしまう所もあった。ブナの巨木の広尾根を辿れば雪面上にアオ、雉、リス、兔、狸などの足跡がいたる所にあり、時に数十メートル先にアオの姿を見ることが出来た。

一五・一五ブナの広尾根の中央部より瘦尾根につながる湾曲点で行動を中止。この先泊まり場を捜すのが難しくなると判断してビバークを決める。風を避けて東斜面に降り格好の所で雪を切りキャンプサイトを造成する。今日は余裕を持って楽々とテントを張る。張り終わって小関君は天気図の為にテント内で待機、私はこの先のルートファイディングの為、空荷にピッケルで広尾根をはずして直角に瘦尾根を下り三〇〇メートル程偵察、県境確認の上テントに引き返した。今日の行動は一二キロメートルだった。

天満飛ぶ心地こそすれ雪絹の

栗駒・焼石　ひと目百山



枎ヶ森を越えた幕場

三月二三日 ブナの森はアカゲラの幹を叩く音で明けていった。快晴である。七・二五テント撤収して最高の泊まり場を後にする。この先は瘦尾根の難所が続き登降も激しく緊張させられる地帯に入る。

八・一九 東山山群六峰のうちの初峰一一五メートルに登る。無風は有難いが暑くてたまらない。やむを得ぬ、とうとう手袋を脱ぎ素手になり帽子を脱ぎ毛のシャツを脱ぎ上半身下着姿となった。素晴らしい天気・・・栗駒、虎毛、焼石など皆手にとるように見える。山壁深く平野などはどこにもない、深山幽谷の真只中にいるのだと実感する。ああ山冥利に尽きるネ。

九・一〇 東山の中央峰で一本立てる。遙か北西に鳥海山見ゆ、既に西の空は暗雲が覆い、黒い雲のスクリーンに一際真っ白い富士型の山体が輝き、そしてその山体が暗雲に反射して笠雲の如く照るさまは真に神々しい。先ほどの巻雲がいつの間にか全天を覆ってこのさき雨が心配される。

東山五峰一一六メートルはなかなかの雄峰である。山体に樹はなく僅かにブッシュあれど殆ど白いピラミッドで田舎のプレスリーじゃないけれど田舎のK2と言ったところか。この登りも下りも急峻で中腹は山体の雪が薙ぎ落ちて垂壁となり二人で苦心の末、空荷でステップを切りシュリングを繋ぎ足してザックを吊り下ろして突破した。東山四峰からは三度、秋田側に避難した苦い思い出が甦る。そのため五峰の突破は殊の外うれしい。

一一〇〇メートル級の東山六峰群が終われば高度をガッターと下げ八五〇のコルを最低に九〇〇メートル級の小峰が連なる低山帯となる。三枚目の地図「焼石岳」に入った。西隣の「樁台」と相接せる所に県境が走り、北上とは言え西を向いたり東を向いたり非常に屈曲点の多い県境尾根である。僅かに一〇〇〇メートルを一八メートル上廻る柏峠であるが、この頂上は数年前の夏合宿小出川流域沢登りで柏沢をつめて頂上に達し岩の目沢下



東山 1070mピークにて

降の記憶がある。その時の印象には出発の前夜日航機が御巢鷹山に墜落し五二〇名死亡と四名の女性の奇跡的生還と言うショッキングな出来事と岩の目沢の僅か海拔七五〇メートル地点の盆なお寒き雪溪の驚きであった。

小骨の多い低山帯を丹念にたどりつつ三キロメートル程進み柏沢左又が深く浸食した大曲付近で休憩となった。ほぼ午後一時であった。

ここから東へ柏峠を目指す。天気は一時曇天となったが再び明るくなってきた。お互いに顔を見合わせては鼻が赤くなったとか、黒くなったとか笑い合っているが、どうも小関君はさっきの難所で腰をひねったらしい。秋田側を眺めると山峡に湯沢へ通じる国道や白い田畑、家々の赤青の屋根が遠く見える。海拔が下がったので地元のマタギが獣を追っているらしくカンジキの古いラッセルを見ることもあり人里近い山だなどと思わせられる。

一四・〇五 柏峠、本縦走の中間点と称している地点なり。とうとう半分まで来たか。憧れの柏峠に憩い感無量である。今やこの頂きより眼前一六〇度の視野の中に焼石連峰が大パノラマとなって展開する。北望すれば大森トンネルと長大な橋梁も見えている。なんたる幸運、来し方、行く方と目をたどり満悦至極なり。更に二〇〇〇メートル、岩記号の賑やかな岩の目岳（九六九メートル）で又一本。微風で気持ちよい。

一四・五〇なのでもう一時間行動を続ける予定。この岩の目岳の西斜面はすべて西へ水を流し県境にブチ当たって東へ湾曲する特異な地形でありそのために県境尾根は四分の三の円周上を迂回せねばならない。

再びの好天で雪はくさり一〇〜二〇センチは潜る。しかしワッパを着ければ底に着雪することが懸念され、それがよい策とは思われず我慢して歩くばかりであった。小関君は前へ出るのを遠慮してまるで従者のように振る舞っているようだった。大森トンネルまではと思って歩き続けたが、一五・一五ちよいと素敵な泊まり場をみつけ、彼に水を向けたがもう少し頑張りましょうとのこと、だいぶ疲れているのによくぞ申した。それから四〇



分前進を続ける。

その途中へリポートのような真つ平らな雪原あり、小学校の校庭といったところか。そこで又モデルにされてハイ スタート！後姿と焼石とこの雪原。彼はスベアのフィルムを忘れてきて、今入っている三六枚一本だけ・・・しかもこのシャッターチャンス多い大好天でボヤクことしきり。

大森トンネルへあと一〇〇メートルと迫ったが四時の天気図タイムも接近し、ここらでとストップしたのが四時に五分前。彼は天気図作成にとりかかり、私はこの先の偵察に出発する。三〇〇メートル程行くと又も広大な雪原がある。近くまで杉の幼木が植え付けられマタギのカンジキが雪庇上に残る。雪原より引き返しブロックを掘り出し防風壁工事を開始、今は無風だが一応西面を中心に防風対策をやりつつテント設営面を下げる。

天気図の方は渤海湾に低気圧発生、西日本は雨域に入りつつあり日本海を発達しながら三陸、北海道に抜けて冬型になり雨から雪に変わり東北北部北海道は大雪になるとの予報。

三月二四日 うつらうつらの夜明け前、テントを叩く雨の音、森を吹き抜ける風の音。昨夜の申合せにより今日は停滞となろう。寝ているのも倦きるが起きているのも辛いもの、気温も高く標高も一〇〇〇メートル位だから寒くもない。小雉に起きてモーニングコーヒを湧かした。彼はまた眠ってしまう。私は起きて記録を書いたり地図を眺めたり。雨は少し凍雨状のようだ。これが雪に変わったら少し行動を起こして三界山の森林限界あたりまで進みたい希望はあるけれどどんなものやら。

NHK第二放送で三味線の話があった。世界のどこで発明されどんな伝播で発達したか、その種類、特徴など興味深い、ハイヤ節ジョンガラ節まで紹介された。

一〇時頃起きて朝食としご飯に海苔梅干し、椎茸わかめふのり入りの味噌汁、又コーヒを飲んで終わり、シュラフにもぐる。雨量はたいしたことが切れ目なく注ぎガスで視界



胆沢川源頭から焼石岳

が三〇〇五〇メートル位。午後四時の天気図は私が担当したがテント内では少し暗すぎてやや苦勞した。寒冷前線通過で夜はシュラフの中でも寒く新聞紙を体に巻いて暖をとる。シュラフも服装も発汗と炊事の蒸気で湿っぽくなっていて保温力はずいぶん低下しているのだろう。

三月二五日 五・二〇起床、雪は止んで風もやっと鎮まる。コーヒーの後、ご飯梅干、味噌汁の朝食。ガスで視界悪いが行動出来ぬことはない。今日は三界山付近まで七キロメートル程前進し明日の焼石突破に備えたい。明日天気回復しない時は大森トンネル付近から国道に下り磐井川湯沢経由で脱出しようと思う。

八・二五出発、余り期待できないとの予想に反し、少し歩き出したら何と明るくなり一時的に青いものがみえたりする。約三キロメートル大森山頂上(一一五一メートル)は一〇・一一着、人里は陽が当たっているらしいが霧氷花咲く山々は吹いていて標高は一二〇〇メートルあたりである。

三枚目の「焼石岳」から四枚目の「三界山」の地図に乗り移る。三界山は県境と町境が三叉に交わる一三八一メートルの独立峰的風貌の山で鋭角的なフォルムがアルペンムードをただよわせている。向こう正面の尾根状の山稜をたどるが左手の尾根の間にカール状の雪田が頂稜まで延びて単なるボサ山ばかり見慣れた目には鮮烈な刺激だ。岳樺の森林限界を抜け這松地衣類の岩稜を突っ切っていくが強風がザラメ雪を捲き上げて猛烈である。

一二・二七 三界山頂上、よき展望台なり。県境を離れ町境に入り東進する訳だがこの頂上は数十メートルの巨大雪庇を張り出してとても恐ろしい。小関君と降り口を偵察するが雪庇の範囲が広くて北面を探しながら大分下ってしまった。尾根はやはり頂上から続いているのを確認して頂上に登り返す。ダイレクトに降りるしかないと思われるので持っているシュリンゲを何本も繋ぎ小関君に確保してもらい雪庇の先端までピッケルで探



焼石岳頂上

り探り覗きにゆく。しかし垂直の雪壁となつてゐるし新雪がたつぷり吹き溜まつてゐるの
でかなり雪崩の危険ありと判断、町境尾根を放棄一三〇五往路を登り口まで急降下する
ことに決定する。僅か一五分で飛ぶ鳥のように下り樹林の中で休む。天気は又よくなつて
きて青空となつた。小関君の質問に答え「焼石頂上は三時で金明水小屋は五時だよ」とい
つたら焼石に三時に着ける訳ないと笑つたので、俺について来るなら三時に頂上を踏める
ぜと先に立つて歩いていく。尾根沿いのラッセルを間もなく切り上げ胆沢川を渡りその河
岸段丘上を行く。地図上にある夏径に沿つたルートである。尾根歩きもよいものだが次第
に火山らしい広い谷となり安定した雪面を闊歩するのもよい気分である。途中大きな池の
畔を通過するが小屋記号の物件は見当たらない。勿論真っ白に凍結して眠つてゐる。谷を
吹き上げる烈風にザックや背中を押されて急かされるように歩いていく。時々吹き溜まり
もあるが程よくウインドクラストしている。焼石本峰がニョッキリと聳え立ちカール状の
地形の奥で旺んに雪煙を上げ、飛び雲が勢いよく斜面に影を走らせてゐる。彼も一生懸命
追つては来るがずいぶん離れた。疲れてくる時間帯だから無理もないか。とうとう憧れの
焼石岳を踏む瞬間の秒読みが始まつたのだと心は躍る。岩壁を攀じるときから南に向きを変
えて本峰を目指す。風は真横となり吹き飛ばされながらじりじりと高度を上げる。

遂に焼石岳山頂だ。三時ぴつたりだ。ここでとっておきの夏蜜柑だったが何せこの烈風、
ツェルトどころか座つてゐるだけでもエネルギーを消耗する。待つこと暫し、彼と記念写
真、これが最後の一コマとか。貴重な頂上の記録である。陽も傾きはじめ金明水の小屋ま
では四キロメートル強あるので油断は禁物、感激にひたつてゐる余裕もない。登つてきた
ルートを下り傾斜が緩んだ所で広大な雪原となる。風速三〇メートルだろうか四〇メート
ルだろうか。めつたやたらに押し流されてたちまち東焼石岳に着く。

一五〇七メートルの平坦な山頂からガツタリ高度を落とした鞍部にかかる。ここはもう
風の通り道、目に見えない空気の激流なのだ。北東に貫く尾根に北西の風がまともに集中

して尿前川の深い谷へナダレ落ちるようだ。這いつくばって蟹のようにじりじり進むのだが、ちよつとも腰を浮かそうものなら張り手を喰らわされて吹き飛ばされること数回、視界もあり青空さえ見えるのにこれまた物凄い危機に直面している。オーバー手袋の中の手の感覚がなくなりかけている。風に耐えて動かないでいてはそれだけでもエネルギーを失い体温を奪われるばかりだ、そして鞍部を突破した。対岸を攀じる、ザックごと斜面に寝て後ろをふり返る。小関君が迫ってくる。

ところが一番酷いところで彼はストックに体重を傾け動きが取れなくなっていた。「ナンド止マルンダ、バカヤロー 少しずつ動くんだ」鞍部にて不動となった彼に罵声をハリ上げて口もとから声はもぎ取られて聞こえるはでもない。もつと腰をおとせ、そこで止まっていたのはジキにバテテ谷底へハジキとばされるぞ・・・ザイル一杯位だから三〇〜四〇メートル先の小関君を激励するがお互い音波は役に立たない。ちらつと遭難の二文字が頭をかすめ、彼を助けに行くか。手足が凍えてきているのも同じ筈、彼の闘志が挫折したら、ギブアップしたらと思うと恐ろしくなった。五分くらいだったか、もつと短かったか長かったか、空身になり迎えに行こうと決めた時に彼が動き出した。「ソウダ ココマデ来イ！ 楽ニナルゾ ガンバレ！」側まで彼が来た。フーツと熱い血が流れ出したような感激か安堵感か・・・。

風に翻弄されながら我々は尾根を伝って北東に進んでいった。天竺山の奇峰が右手から次第に正面に迫り経塚山もずいぶん接近して来た。おおらかな雪原を満帆のしぶきを上げながら遙か遠く金明水の小屋を見つけ進んでいく。今夜はあの小屋と思うとやたら嬉しくなる。小関君を引き離して小屋の扉を除雪のため急ぐ。入口の二立方メートル程の除雪を始めて途中ひよいと時計を見ると「おお ジャスト五時ではないか」しかし二重の窓から入れたので除雪はやめた。やはり例年より雪は少なく遠くから見えたのもそのせいである。

「ずいぶん厳しかったな」とお互い顔を見合わせて笑い合っただけで無風の空間に居る幸せを噛みしめる。本山行初めての小屋泊まりである。実にうれしい。そういえば今日はムスコの誕生日、わが家では誕生日をやっている頃か。僅か残った酒で今日の敢闘に乾杯だ！一五・五キロメートルはあったかな、本当にご苦労さん。

今冬この小屋に入った記録は一つもなかった。

三月二十六日 四・四〇 寒い。小関君を起こして朝食の準備をする。吊るした装備は皆凍っている。充分腹ごしらえをして小屋を出たのが七・三四 風は強いが視界はよい。記念写真を撮りたいところだが残念。経塚山が白い火焰に包まれている。小屋から頂上まで三キロメートル、途中の上がり下がり著しい。その鞍部は火山礫が赤黒く露出している地帯だ。小関君も快調の様子、小屋泊まりは身体が休まる。

九・四〇 経塚山頂上、一三七三メートル。とうとう最後の頂上に立った。焼石岳も栗駒山も雲に霞んではっきり見えぬが高い所はずいぶん吹いているのだろう。昨日に続き今日は私の誕生日、この頂上に立ちそして今日成功の名誉を背負ってわが家に帰れるのだ。岩石累々たる頂上を辞し南稜降下地点まで二〇〇メートル東方に移動、尾根を見定めて急斜面を下る。経塚南面は一带に新雪が吹き溜まり旧雪の堅雪の上のこととてキックステップ効かず二人共流されてしまう、落ちる所まで落ちてスリップが終わり、ヤーレヤレ雪崩なくてヨカッタスナ。六枚目の地形図「石沢ダム」だ。

九・四七、一〇六七メートルのコルを通過する。二〇分後、南稜の頭。ここで尾根は二つに分岐する。慎重に！。風雪となってきた山は荒れ出した。周囲の尾根も視界から消えた。

一〇・五〇 一本立てる。主稜線や経塚降り口でなくてよかった。ラッキーだった。少し遅れればずいぶん困難になったと推測される。

次第にツツジのような灌木が露出し、雪少なくヤブ漕ぎに苦勞するようになってくる。着雪少ないのに吹き溜まりは雪くさり、また空洞も多く時々もんどり打って沈没することしばしば。下りは読図の確かな小関君が先に立ち快いペースでぐんぐん下る。南稜末端まで下り湿地帯を東に横断する。雪の消えた湿地の水にミズバショウの蕾もみられ春の兆しが充満して林道上の雪を割って雪解け水の音もする。

尿前川のコンクリート橋を渡る頃は午後一時だった。金明水から尿前まで一二・五キロメートルのうち三キロメートルを残すのみとなる。歩けど歩けど迫ってくる雪の中また一時間、尿前のバス停に出た。素早く見廻すとイタイタ、岩手県南バス。時刻表を見ると一四・一七発、一〇分程の待ち時間を最近出来たばかりのモダンな公衆電話で費やす。お客は登山者二名のみ、運賃八〇〇円。一時間のバス旅行中、車の振動は電気マッサージみたいな夢心地であった。

水沢駅では列車が出たばかり、タッチの差。それでもいいさ、空腹でもあるし喉もかわいているし、よきパートナーにご馳走してやらなきや。駅前の食堂に入りビールで縦走成功の祝杯をあげた。

一六・一六色々ありましたなアこの六日間、と言いながら脱ぎたいプラスチック靴だがほぼ定員の乗車率ではそれが出来ない。列車は一関で乗り継ぎ雪のない平野をひた走る。

東仙台の駅に降りればわが娘が車で出迎えに来る予定だ。六日間の山旅で栗駒く焼石間七〇キロメートルの縦走が成功した。山岳会創立十周年の仙台山脈縦走、二十周年の後仙台山脈縦走にも劣らぬ大縦走である。私の単独行の課題として五度目のアタックであったが小関君が加わっての成功と言うことで、言うならば仙台YMC A山岳会の創立三十周年記念山行「後ろうしろ仙台山脈積雪期縦走」だったのではないか。会長にこんなことを言

ったら彼は腹を抱えて笑い転げるだろうな、などとうつらうつら居眠りしながら考え続けていた。

それにしても三月二六日でわが誕生日に帰宅できてよかった。さて俺は何才になったんだっけ、その先は眠ってしまって何も判らなくなってしまうた。

白銀の栗駒駆けて遙かなる

今日経塚に夢かなうなり

(やまびと三二号掲載)

この稿の写真は全て小関純夫氏撮影

